

寄付をいただきました 児童の体力向上に

役立てます

12月4日に有限会社 森の国から、「児童の体力向上に役立ててほしい」と20万円の寄付をいただきました。今後、町内の各小学校において、体力向上に役立つよう有効に活用させていただきます。ありがとうございました。



▶寄付を手渡す伊澤大介代表取締役(左)

まちのたから (34)

文化財室通信

シリーズ「日本遺産」

第8話

今回から、第3章「大山信仰と牛馬市をささえた大山道と道沿いの人々の暮らし」について紹介します。

全ての道は、大山へ

今のように自動車が無い時代、あたり前のことですが交通手段は徒歩が基本です。牛馬の加護を願って参詣する人、牛馬を商うために連れて行く人、大山さんの祭りを見学する人・・・それぞれ目的が違っても大山寺へ訪れる人々が使った道が「大山道」と呼ばれています。

大山道は「坊領」道「尾高」道など沿線の主な地名が付いていたりします。この道をどこまで細分化するかは報告書等によって異なりますが、この日本遺産のストーリーでは坊領道・尾高道・溝口道・横手道・川床道の五つの主要道と大山寺の里坊屋敷と代官所があった丸山と大山寺とを結んだ丸山道を挙げています。これらの道は、大山寺を中心に放射状に延びており、いろいろな方面からの人々の往來を支えています。

大山寺の春祭りや牛馬市の日の前

後は、より多くの人々が集まるので、国の境目にある番所では通行人改めにも特別な取り計らいをしたほどでした。大山道沿いの村々には、博労や参詣者が泊まるための宿や休憩のための茶屋などができ、沿道は大いに賑わったようです。

大山道「横手道」

大山道の一つである横手道は、岡山県美作方面からの参詣道です。延助(岡山県真庭市)から内海峠を越えて下蚊屋く御机く鍵掛峠を経て、大山の西側山麓をほぼ水平に進んで大山寺へと至ります。標高800メートル前後をほぼ水平(横方向)に進んでいくことから「横手道」と呼ばれるようになったと言われています。この道は、備前・備中方面から出雲街道や伯耆往來を経て根雨く江尾を経てきた道とも「小柳分れ」で合流するので、山陽方面、ひいては山陽に繋がるエリアからの主要道とも言えます。

横手道沿線に残る大山信仰

大山道沿いには、大山信仰の面影を感じるものが残されています。江府町の下蚊屋や御机では、横手道沿いにかけて博労宿が軒を連ねて



▲文殊堂

いました。沿道には「大智明(大権現)」の名が刻まれた常夜灯や道行く人々のための道標が現存しており、往時の様子が偲べれます。

大山環状道路三ノ沢付近には、文殊堂という小さな赤い建物があります。名前の通り文殊菩薩を祀っており、現在の建物は昭和40年に再建されました。堂の横の広場は、昭和の始めまで大山牛馬市に往來する牛馬の休み場所でした。

大山寺へ向かって横手道を進み、精進川を渡った先に見える石の大鳥居(国登録)は、嘉永8(1854)年に洞明院の禅信が願主、日野の富豪近藤平右衛門、梅林喜平治が施主になって造立されたものです。この場所には、かつて番所がおかれ、大山寺西側の玄関口でもありました。

(人権・社会教育課 文化財室)